

## 3927 地球のかおり：「雨あがりの峠」（産経新聞）心模様

アラスカ湾から、北極海、カナダ領・イヌヴィックをめざした一人旅。  
今回は、イヌヴィックまで行くと心に決めていた。  
気負いも何もない。まさに、頂上を忘れて登る富士の山。  
到着地を忘れて、道中を楽しめばいい。その帰路に出会った、光景だった。  
厳しくとも、苦しくとも、その向こうに感動があることを  
体験上、わかっている。この光景もその一つ。  
有形の作品を残さなくても、達成することで、無形の感動や喜びがある。  
絵になる所を探さなくても、心を惹きつける景観に出会える。未知との遭遇。  
それが私の旅の醍醐味。スマイル、オン、ミー。  
裏切らないことが多い。この作品もそうだが、特別な思いがある。

想定外のことが発生するかもしれない覚悟の未知への挑戦。  
その向こうの未知への挑戦には、感動がある。生きているということを教えてくれる。  
旅のスタイルはひとり行脚。松尾芭蕉のように、お伴もいないひとり旅。  
自立に自律。第二の人生だからこそできること。  
今だから言える。鎌倉禅寺円覚寺での十年の座住。老和尚から学び、心の訓練をしてきた。  
弓道の大家でもある。的を持ち、的を絞り、的を狙う。ライバルは、今一人の自分自身。  
何の不安も持たず、ただ淡々と目標に挑戦。結果、心の大きな成果を得た。

アラスカ国境を越えたカナダ側の地の果て、イヌヴィック。片道、1,400 キロ。  
往路では、風雨や山坂もなんのその、浪々と流れるユーコン河を小さなフェリーで渡る。  
流れが速い。ポンポン蒸気。かなり、フェリー船が流される。  
何しろ小さな船。車は3台程度。このまま流されるのではないかと不安を抱いた。  
静寂の中、バリバリ。エンジンさん、頑張っただけと願った。  
環境や状況は、地の果てと形容するに相応わしい。イヌヴィックをめざし、無事に到着。  
小さな宿があった。風呂があった。熱いお湯が出た。  
色がついたお湯だったが、実にありがたい。バスタブも色がついて、汚れたように見えた。  
何が普通なのか。旅する環境や状況、お国柄で、人生がいろいろなように、様々。  
好き嫌いなど言える状況ではない。だから、鍛えられる。

この最北端に到達するにはいろいろあった。

この達成感はひとしお。充実感も最高。挑戦してよかった。

身体を休め、帰路にも備えなければならない。

空腹。夕食は、体力もつけたいと、カリブーの肉を注文した。実にかたい肉だった。

肉と格闘の末、顎が疲れて、ワインで飲み込む場面もあったほど。

便利が当たり前、美味しくもないなど、この環境と状況下では、文句は言えない。

まず、腹の足し。体力をつけないことには、どうにもならない。

翌日、寒村を散策。端から端まで歩いても、30分もかからない小さな村。

想像したような、いや、想像外の普通の村。

ただ、記念館には、珍しいものがあり、生活も知りたい。見学に時間を使った。

景観はというと、広大なだけで、作品に残すには魅力がない。

北極海は、だだっ広いだけ。もちろん、フィルムスケッチ・画像記録には時間を使った。

犬そりなど、ガイドを雇ってまで、これ以上、行く気にはなれなかった。

到達した、達成感、充実感だけで充分。しかし、久楽流には、いささか不満足な画像蓄積。

文章に書くとか、人様に話すとか、の方法が必要ではないかと、

素人の分野だが、文筆分野にも挑戦の必要があるのではないかと勉強を開始。

しかし、四苦八苦。思い通りに行かない。恥かく、汗かく、を覚悟して、心模様を書いている。

文章の、起承転結などあったものでないが、自己流・久楽流に、今日に至っている。

人生の後半の生き方。第二の夢挑戦の人生、セブンティのチャレンジが始まった。

並行して、総括して、まとめることも視野に入ってきた。

オヤジのように記録。私の場合、書くだけでなく、話す、見ていただく、を夢見ている。

求められれば、講演、夢と元気と文化を発信したい。厚かましく、いろいろ機会をいただいた。

数々の実体験セミナー。地球紀行〜夢と人生を語る〜 等々・・・

産経新聞でも、7年間。掲載させていただいた。海外だけでなく、国内編も打診されたが、

これまでの流れから、世代交代と遠慮した。7年も続いたのは、新記録らしい。

講演に関しても、2017年12月、国際交流会館（約200名）を最後に、方針を変更。

身体と時間、サムマネー、何に優先、集中させるといいのか模索の日々。

時代も激変。そんな悩みを持ちながら、今日に至っている。

またまた脱線。話を元に戻して、

同じ道を戻らざるを得ない。ユーコン河のポンポン蒸気船の渡しも心配。

天候もどうなるか、心配しだしたらきりが無い。いつものように、前向きに全力投球。

しかし、行きはよいよい、帰りはこわい。地道である。

往路、タイヤを1本、損傷している。しかし、無事到着、予備の複数のタイヤも携帯していた。

悪路。岩がむき出しで、ゴツゴツしているところもあった。要注意と、慎重に進んだ。

地道の土は、粒子が細かい。晴れば粉塵、雨が降れば、ペースト状。

道路事情も大切だが、恐ろしいのは天候。

舗装された道ではない。路肩も軟弱。フェリーでの目撃以外、対向車は見かけなかった。

車が離合できるほどの道幅もないところが多い。よく訪ねたものである。

一山越えると、天候が急変することもしばしば。朝夕の寒暖の差は、半端ではない。



まさに冒険そのもの。

遭遇した体験。よく助かったという思いがある。雨が降り出した。小雨だったが・・・

やがて、雪まじりの雨に変わった。最初は、舞い散るように、風も出てきた。

やがて、雪に変わった。しとしと降るといふか、静寂そのもの。

雪が積もるほどではないと、軽く考えていた。しかし、いつまでたっても、降り止まない。

やがて、山かげに差し掛かった。曲がりくねったアップダウンの地道。

平地にさしかかった時だった。道が真っ白になってきた。路肩との境界線が見えない。

やがて、地道が雪でかき消され、道がなくなった。やばい！ 粘土質。

進むも危険。とどまるも危険。熊もいる。

山かげまでなんとか行かないと、と前進。往路を体験していたので助かったのかも・・・

往路も厳しかったので、画像やメモにも残している。記憶にも刻まれていた。

まず、中間地点の宿泊しているイーグルプレインまで、たどり着ければ何とかなる。

やがて、また、こぬか雨になった。恐る恐る車を走らせた。

時に、車を降りて、路肩を確認。足元は、びしょびしょの、ドロドロ。

車の運転席も、ドロドロの状態、気分までめいる。

山あり、谷あり、坂あり、蛇行や曲がりくねった地道。誰も助ける人はいない。自己責任。  
そして、この峠にさしかかった。この峠をやり過ごせば、安全圏に入る。一安心。  
しかし、安心できない状況が次々と・・・峠までが大変だった。いくつもの難関が・・・  
少し、トラウマに。第一関門クリアー、やれやれ、雨もあがった。  
これまでは、振り返る余裕もなかった。ただ、無事に到着することが脳裏に。  
前進することに専念した。峠道で深呼吸。危機脱出、やれやれ。

窓を開け、ボックスに準備していた飲み物を一口。なんとも言えない安心と至福の時間。  
やがて、車外に出て深呼吸。来た道を振り返った。  
そして、この霧走る光景を目撃。刻々と変化する眼下の光景。  
今、どの辺りだろうと、思いを巡らせていた。  
その後、時間の余裕もあったので、車内に戻り、音楽をかけ、心を整えた。  
壮大なスケールの大きなクラシック音楽。  
カラヤン指揮のペールギュントが、ここでも登場した。  
今一度と、車外に出てみると、光景が変わっていた。カメラを取り出した。

厳しさの向こうに、苦を越えてこそ、頂上に到達してこそ、素晴らしい出会いがある。  
最初は、グレー、一色で、何の変哲もない光景。  
運も味方した。風が吹き、霧が走り、一期一会の絶妙の瞬きになった。  
こんな瞬間があるからやめられない。地球が微笑んでくれたとしか、言いようがない。  
後先を考えずに、引き込まれてしまう。偶然か、必然か。  
それだけの魅力がある。北の果てや地の果て、ひとり旅という、旅のスタイル。  
こんな貴重な瞬間との出会い、一度や二度ではない。  
神がかりというか、不思議な力のおかげで作品が残っている。感謝感謝である。  
たかが一枚の**真実を写す**アナログ「写真」。フィルムスケッチ1枚。  
夢絵のモチーフになる。今ひとつ「写心」心が映ると、勝手ながら思っている。  
たかが写真だが、過去現在未来が凝縮された作品かもしれない。  
どうしてこんなことが、今日まで、出来ているのか、自分でも不思議でならない。  
運の強さとこだわりと誰かのおかげで、今日があるように思えてならない。

**出来る時に、出来ることを、精一杯努力して、あとは、ケセラセラ。**

**8月8日、滋賀県・琵琶湖の花火大会、現場で、元気もらった。アトリエ帰宅は午前様。  
心身健康で、継続して頑張ることができれば最高ののだが・・・**